

トーキングロード  
嘶家人生 山あり、谷あり

## 〔第13回〕

## 花筏

+ 文 林家木りん

Text by Kirin Hayashiya

年末お正月特番の「笑点」の企画で竜電関と輝関と相撲を取らせていただきました！

観ていただいた方もいらっしやると思います。このお仕事が出来た時、僕の血が騒ぎ出しました。

それもそのはずです。僕は相撲部屋で生まれ、父は元大関清國なので。家には土俵があり、中学生の頃は部屋の力士と稽古したり、ちゃんこを食べたりしていたので血が騒がないわけがないのです。

そして本番当日を迎え、15年ぶりにまわしを締め土俵に上がりました。目の前には現役バリバリの幕内力士竜電関、負けると頭で分かっているも勝負気持ちで立会い。

無我夢中で相手の胸に当たり、まわしを取り力を入れればなしで右四つの形に。粘りに粘りましたが、最後は負けてしまいました。

でも負けるのは当たり前なんです、だって相手はプロなんですから。当たり前なんですけど悔しい。

久しぶりに悔しいという感情を思い出しました(笑)。

日常ではあり得ない関取との対戦は貴重な体験でした。

こういう普通じゃありえない相撲の嘶というのが落語にもございます。それが「花筏」という嘶。

提灯屋の主人の元に相撲部屋の親方が。提灯の注文だと思った主人だったが、そうではなく親方からの頼みは不思議なもの。

それは部屋の力士一同で水戸へ地方巡業に赴くことになったのだが、看板大関である花筏が大病を患って巡業に出られない。

巡業に看板大関が行けないとなると、興行主も村の者たちもがっかりしてしまいます。

そこで親方は見た目や背格好の似ている提灯屋の主人に「相撲は取らなくてもいいから顔だけでも見せてくれなにか、来てくれれば堂々と座っているだけでよいから」というお願いをしま

した。

洪々この願いを聞き入れた提灯屋のご主人。

巡業先では言われた通り堂々と座ってやり過ごしていたが、日が経つにつれ、花筏は元気だという噂がたちました。元氣とわかった以上、村人達は花筏の相撲を観たいと騒ぎ出します。小心者の提灯屋のご主人は仕方なく土俵に上がるのですが…。

さあこの後ご主人の運命は？！ここからは落語をお楽しみください！



## profile

1989年東京浅草生まれ。父は元大関・清國勝雄。  
2009年林家木久扇に入門  
2013年二ツ目昇進。  
身長192cmと、落語協会一の高身長！  
趣味は相撲、野球、読書、競馬、マラソン、空港見学。  
空港についてエッセイ、コラムを書くほどの空港マニア。  
初の著書『師匠!』発売中